巡礼者イニゴ

聖イグナチオ・デ・ロヨラの劇的な生涯の劇

塩谷惠策 SJ

第十幕　第三場（その 2）

ローマにて

1523 年聖週間と復活祭の週

登場人物：	イニゴ・デ・ロヨラ	巡礼者
	ハイメ＋イサベル	イニゴの騎士時代の友人夫妻
	ルイス＋マリア	同
	ホセ＋フランシスカ	同

〖語り〗枝の主日（1523 年 3 月 29 日）にローマに着いたイニゴは、騎士時代の仲間に会い、夕食に招かれました。そこにはバスクからローマに来ていた仲間たちも集まっていました。

イニゴ：わたしが諸君とパンプローナで別れて以来、ずいぶん変わったことに驚いておられるが、無理もないと思う。あの頃は血気にはやる若者で、功名心と姫たちにもてることだけを考えて、騎士小説の主人公アマディス気取りで振舞っていたからね。

ハイメ:　あの頃のイニゴはカッコよく、颯爽としていたね。

ルイス：パンプローナの城を守る戦いでのイニゴの獅子奮迅の戦いぶりは、すさまじかったからね！

イニゴ：パンプローナで負傷してロヨラに運ばれた後、一時危篤になり、医者にも見放されたけれど、神が見放されず一命をとりとめたんだ。

ハイメ：パンプローナで、フランス兵に運ばれて行くイニゴを見送った時、イニゴの命をお助け下さいと祈ったものだ。

イニゴ：傷がいえるまで長い間ロヨラの病室にくぎ付けになった時、時間がたっぷりあったので、それまでの生活や、人生の意味や神のことなどいろいろ考えた。

ホセ：人生の意味について考えるなんて、僕が知っていたかつてのイニゴの性（しょう）に合わないようにも見えるが・・・・。　一度失いかけた命をまた与えられて、それをどう役に立てたらいいか考えたわけだ。

イニゴ：そういうことになる。地上の騎士として、いくら勇名をはせ富を築い

ても、所詮最後に行きつくところが墓地であるなら、「人生は、墓があってもはかない」ではないか？

イサベル： あら、昔のイニゴ様にもどりましたね？

イニゴ： ああ、あなたたちと話していると、ついあの頃に帰ってしまいそうだ。ともかく、性に合うも合わないも、ロヨラの病室に何か月も閉じ込められていると、与えられた二冊の本を読んで、考えるほかに、何もすることがなかったからね。

ルイス： 二冊の本？君の好きだった『アマディス』か？

イニゴ： うん。傷が治り始めたころは、退屈しのぎに『アマディス』のような騎士小説をもってきてくれるよう頼んだんだ。ところが、城には、『キリスト伝』と『聖人たちの華』の二冊しかないということで、姉がそれを持ってきたんだ。

ハイメ: それでしぶしぶそれを読みだしたっていう訳だね。

イニゴ： そうなんだ。他に何もすることがなかったからね。それに義姉（あね）には小さい時から世話になっているから、その勧めを無にしたくもなかったし。

マリア： マグダレーナお姉さまですね？私も可愛がっていただきました。イニゴ様が、神様に生涯を捧げてお仕えしようと決心なさるまでに、お義姉様も大きな役割を果たされたのですね。

イニゴ：　確かにその通りです。私が考え込んで、生きる道を模索していた時、黙って見守っていてくれました。

マリア：　イニゴ様とともに、一生懸命に「歩むべき道をお示しください」と、お祈りになったと思いますわ。

イニゴ：　そのころの事情を話すのは「聞くも涙、語るも涙の物語」になるが、この劇の第二幕、第三幕を見てください。

ホセ：　よし、分かった。ところで、これからどうするつもりなんだ？

イニゴ：　実は、ほんの数人にしか話していないのだが、これから主キリストが十字架にかかり、死に、そして復活された聖地エルサレムを巡礼したいと思っているんだ。

一同：　エルサレムに！！

ホセ：　それはまた、大きな決心をしたものだね！教皇様の祝福と許可も必要になるし。

イニゴ：　そうなんだ。それで、ローマにやってきたわけだ。

（その３へ続く）